
エンゲージは唐突に・・・

どこかの天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンゲージは唐突に・・・

【ZPDF】

Z6021F

【作者名】

どこかの天使

【あらすじ】

普通の中学生坂井はい今まで平凡な暮らしをしていた。たが彼にとりついた羽は正義感となり離れなくなる

第一話（前書き）

すみません初投稿です
あまり慣れないんで・・・

意見、その他待っています。

第一話

第一話 羽

「なんだお前もか・・・」と坂井はあきれで言つ
「なんだとはなによ」と石見が突き返す。

「お前もオール電化かー」

「だつて政府が推奨してんのだもん」

「ちつ政府を盾にしたな」

登校中のバス車内で二人は討論を始めていた。
それにも理由がある

2009年、

世界恐慌はアジア諸国に猛威を振い
貧困層によるテロは増加する。

南アメリカ、アフリカ諸国、中東では民族対立による内戦、紛争が
激化、

先進国では石油の高騰が経済を締め付ける事態にまでなったからだ。

坂井は中学三年の中学生である

石見は幼馴染の同級生である

(始まり)

そして今日、この日が彼を巻き込む運命のプロローグだとは誰も知
らなかつた。

バスが学校に着くとやけに慌ただしいのだが、
上を見ればヘリコプターまでもが飛んでいた

バスから降りると軍人が荷物チェックまで行つていたのだ

そして自分の番がきた
ブザーの音が響き渡る
引っかかったのだ

不意に「逃げて」という声がした
とつさに体が反射的に動きだした

坂井は我を忘れていたのだ。

とにかく自分の意思ではなかつた。

たどり着いた場所は古い神社

坂井はなにかと思い自分の体を撫でた。

すると

何かの羽が出てきた、

するとそここの神主が出てきた

「ちょっとここに来なさい」神主は言つ

坂井は神主に寄つた

神主は「この羽が貴方を導いていた。」これに乗せるために・・・

そこにはあつたのは白く鳥を思わせるような戦闘機だった。

神主は重い口を開く「これは大きな戦いの予兆なんだ、そして君は

指名されたんだ」

第一話（後書き）

読んで頂きました。ありがとうございます。

それを

無表情に聞いていた坂井は

「えつ、あの・・・」と言いたくなっていた。

だが、

自分の本能である正義感に触れていた

もう、彼には断る事も出来なかつた。

それはどうしても気になつた

いま目の前にある飛行機がなぜ今に現れるか
それとあの羽とか予兆に繋がるのか

そして

その神主に

「まずどうしたらいいんですか?」と訪ねる
すると、

「その羽をコックピットに差し込めと言われた
普通の人なら躊躇するが・・

坂井はなにも考えず

湧き上がっている興味を抑えれていなかつた
コックピットの側面のパネルにそれの穴はあつた。
ブスツと差し込むと

HUD(液晶画面のサポート電子器具)に

女性の顔が映る

年は自分と同じ年代だ

彼女はそつと口を上げる

「急にこんなことに巻き込んでみませんでした。

それに学校から逃げたんで・・・」

「学校とかには一報いれといたから」

「今後なのですが・・・

あなたみたいに突然使命された方はある機関に送られます。

あなたの家族には息子さんの遺伝子は特別なものでしたと伝えました。

「そう、それはよかったです。」

急にブザーが鳴る。

「まさかコレってスクランブル？」

坂井は慌てながらいった。

「はい、ですがあなたは・・・」

「これって半分はブレインコントロールだろ」

「多分、行ける」

「むちやくちやですよ、相手はロシアの戦闘機ですよ」

「もう機械には慣れた」

すると坂井は垂直に離陸をしレーダーを見ながら敵を発見して

数々の操作を直感的に覚える

坂井を見て

彼女は「ど素人なのに」と見るだけだった。

第一話（後書き）

では次回のキーワードを
：羽に眠っていた彼女
：坂井の本能、才能
：彼女の過去

第三話

敵戦闘機エングージと交戦した時には

彼女は震えあがっていた。

彼女はフラッシュバック状態になっていたのだった

そして、坂井もフラッシュバックに陥る

誰かの声が聞こえていた

自分の祖父の若いころの声だ

これは大戦中の空・・・

お祖父さんが飛んでいる・・・

握っているのはあの羽・・・

彼女の残像も見た、

これは・・・

彼女の遺品・・・

そしてあの「逃げて」という羽の中から聞こえる彼女の声・・・

お祖父さんは脱出していた・・・

そして羽を大事そうに握り締めている

「かちーーん！」と機関砲の弾が弾き返る音で

坂井は我に帰る

風防ギリギリの所に機関砲の弾がすり抜けていく

この状況だとは知らなかつた坂井は追い詰められた、

その後、三機中、一機は落とせたが

一機とのドッグファイトになつた。

完全にけつ取り合いである

取られたら・・・落とされる

その時だつた敵戦闘機は失速ぎりぎりになるまで減速し、後ろに荷重をかけながら・・・

気がついたら真正面に敵機は居た

坂井はミサイルロックを爪で開け巧妙なタッチでミサイルを放つ

その後、操縦桿を全開にしてロールする

敵戦闘機は爆発しながら炎上、

それに気づいた彼女は

「ふーーーう・・・。あまり無茶しないでくださいよ・・・」と深くため息をついた、

坂井は「よかつた、すべて解かつた」と言いながら帰路についた。

第三話（後書き）

読んで頂き本当に有り難うございました。

次話のキーワードはありません。

本当にすみません・・・

それと

読者感想などは大歓迎ですので・・・

よろしければお願ひいたします。

一戦を交えて疲労困憊していた坂井は

わざわざ居た神社に帰らうとしていた

神社に帰ると、

彼女に坂井はある」とを尋ねた・・・

「君の名は?」

あまりに単純な質問に彼女は戸惑った。

「いまではただの靈なんだけど・・・いいかな・・・

「ああ、いいよ」

彼女は約六十年間口にしなかつた名前を解放することとなる・・・

「零つて言つんだ……」

坂井は「やうか……じゃ零つてよんでいい……？」とまるで

解放した事をもつ一つの言葉で包み込む……

零はとても嬉しそうにほほ笑んだ……

「あのや、家に帰つていいかな……」

「はい、いいですか？」の事せう内密に……

「わかつてゐよ……」

帰路に就く間はもう夜だった……

空には満天の星が輝いていた……

だか、とても寂しかった……

そこで鼻歌を歌い出す「上を向いてあるいひ」とこの歌だった

もつて来た羽（零）も歌い出す、とても寂しい夜だった・・・

家に帰ると父が出てきて、「お・・お前、お祖父さんの羽をつかつたのか・・・」と言われた

「い・・い」と返事する

「お前は俺が誇る最高の息子だな・・・勤めは果たせよ・・・」と言つてくれた

家族の了解もあり一件落着といつことになつたが・・・

もう一つ気になる点があつた・・・

零の言つていた俺が行く機関とはなんだらうか・・・

第四話（後書き）

今日で四話ですね・・・
読んで頂きありがとうございました・・・

それとPVが100を超えました。
とても嬉しいです。

次回をお楽しみに・・・

第五話

あれから数日後・・・・・

坂井は家から学校に通つような平凡な日々を過いでいた

彼の通う学校はちょっとした私立の中学校・・・

平均的に点数を出せば入ったようなもんだ・・・

校風も公立ぐらいだつた・・・

最初はとても緊張したが・・・

今では同級生も沢山できている

今日も授業をして帰る所だつた

不意に幼馴染の石見が顔を出す

「少しつきあつてくれるかな・・・・」

石見は恥ずかしそうにいつ

「ああ、いいよ」と坂井は言った

帰り道、石見と坂井は一緒に帰つていた・・・

「今日・・・何の日だか覚えてる・・・」

「えっ、何の日・・・って、あつ、お前の誕生日だった！」

「祝うだけでいいからさ・・・」

「行くよ、当たり前だら」

彼女の家に着くと誕生日ケーキが焼けていた。

なんといつか・・・とても温かみがあつて美味しいそつだった。

坂井はまづ「誕生日おめでとう」と出来るだけ大きな声で言つてあげることにした

それからケーキを食べながらお茶を楽しむ・・・

なんと綺麗な時間なのだろうか・・・

と考えながらダラダラとお茶を飲み干す。

その時だった、

ブザーが鳴り響く・・・

石見には「「めん急用」とだけ伝えて神社へ急ぐ

座席に乗り込んで羽（零）を刺す・・・

零は「敵性航空が四機います・・・ぐれぐれも気をつけて・・・」
とだけあわてて伝えた。

坂井は気合いを入れて操縦桿を握りしめた。

第五話（後書き）

読んで頂きました本当に有り難うございました

やつと節田の五話ですね

少し休もうかな・・・

ご感想待つております・・・

第六話（前書き）

お待たせしました！

第六話ができました！

それと、PVが250を突破しました！

本当にありがとうございました。

第六話

坂井は戦闘機に乗りだすと、

「零に聞きたいことがあるんだけど……僕達の敵ってどこの国だろ？」「と質問した。

「うん、実はまだ公式には知られてない事、

なんだけどロシア軍部のクーデターが起きていて、ロシア軍部は日本にテロを仕掛けつつもうらじこくして飛ばして領空侵犯をしているから

戦闘機を連日、

迎撃していること、

「言つてみれば証拠隠滅つてことよ」

「もう一つ聞いていいかな。機関って何？」

「機関は日本から護衛として雇われてる小規模の軍隊。非公式なんだけどね……」

「それになんで僕が？」

「ある実験の為、氣配とかと考へればいいけど、Hースパイロットの遺伝子かな・・・」

それで空を見る、

增幅装置で田とリンクさせれば360°の視界が三次元からされ、氣配からも読み取れるし

多弾頭のミサイルを蜘蛛の糸のよみでコントロールできる、敵ミサイルだらうとしね。」

「質問は以上?」

「うん・・・それって僕が超兵器になるってこと?」

「世界の平和が守れるんだから。こんな嬉しい能力は無いんだよ」

坂井は少しため息をつくと

Hンジンを起動させた。

空にあがると

息つく暇もなく

「敵編隊多数接近中。」

「零、わざわざ言つたやつ起動出来るか・・・」

「今ですか?」

「敵が多い、勝ち田はないならな」

「わかりましたよ・・・」

スパリと頭のなかに空の全てが移る

「敵誘導弾九発、急速接近中」

「大丈夫だ!、逆誘導する」

ミサイルは頭の中でどこにあてるか考えるだけで撃墜できた。

当てる位置も細かい変更が出来、

敵を脱出せしる事まで出来た

虐殺では平和は出来ないと考えていた、

坂井は敵機を全機生還させていた。

第六話（後書き）

次回をお楽しみに・・・

近々発表します。

敵戦闘機を全機軽々と落とした

坂井は少しいい気持ちだった・・・

自分が超兵器でも人を殺さずに済む・・・と

分かったのだから・・・

しかしながら、その想像は一瞬で碎かれる・・・

「操縦席（cockpit）を狙つて下さい。生きて返してはいけません・・・」

「それが戦闘機乗り（機関）の掟です・・・」

「なんだって！そんなの虐殺だ。」

「逃せても彼らはまた空に上がります。」

「空に魅せられた人間はまた空に逝くものなんです」

それを聞いた坂井は愕然とした・・・

もう何も言えなかつた・・・

自分がつて、落とされたら機関にでも頼み・・・
また空に上がつていた・・・

殺すほかない・・・

それが空の戦い・・・その覚悟で人は空に上がる・・・

零は少し間を置いて坂井と話をした・・・

神社に帰つてからである・・・

「殺さずに・・・何かを守ることには無理です」
零は言つた。

ふと、学校のクラスメイトを思い出す・・・

「あつ・・・」

「機関から通達がありましたよ・・・」

「えつ！」

坂井は驚いた！

「明日の明朝500時に組織と会合せよ・・・」とのことです。」

「やはり正式に入隊をせられるのでしょうか・・・

坂井は少しばかし考えた

(機関には小隊みたいなものがあるのか・・・)

(自分たちと同じような・・・)

(やつぱり才能を持った人間は数人は居るだろ？)

(超兵器には数が必要つてか？)

「なに考へてるんですか！明日早いんですよ！」

「あ、うん・・・」

(明日は何が起るのか・・・)

第七話（後書き）

読んいただき本当に有り難う御座いました・・・
ご感想、待っています

ハルローゲ（前書き）

急に最終回にしたくなり、やってしまった・・・

しかし・・・

続編として・・・

壮大な物を考えています・・・

ハルローゲ期待！

エピローグ

次の日、

機関に坂井は出向いていた・・・
住所を頼りに向かった先は、広大な空き地だった。

そこに一人の男が立っていた。

坂井は声を掛ける

「機関の方ですか？」

男は、

「ああそうだぜ」

「あ～君か、坂井君は・・・」

「はい・・・」

「いじで本題だが・・・」

「お前さ・・・」

「人を殺せるか？」

予想外の質問をされた・・・

「君も機関に入ればただの道具にすぎないぜ・・・」

「人を殺す道具、使い捨てだ。」

「つまり、お前に触れた敵は死ぬ」

「道具は消耗品だからな・・・」

「それとこのまま学生生活を楽しむのとどちらがいい?」

坂井は戸惑つた・・・

でも人は殺すことが出来ない・・・

何しろ、自分は殺戮の道具にはなりたくないかった・・・

坂井はついに

零にこう言った・・・「俺は・・・止める」

零は「うん・・・」とだけ言つてくれた・・・

そして、

男に「止めさせていただきます・・・」

といいその場を去つて行つた。

男は蒼く壮大な空を見ながら・・・

ひとり」とのよつに呟いた・・・

「君は全く逆の世界にもう一度、生まれるよ

坂井は零に聞く、

「どうすんの、零は・・・」

「あなた自身が必要になつたら、また来ますよ」

「あ、うん、分かつた・・・」

「」」」見ると空つて綺麗だなあ~

と零に話す・・・

「綺麗ですね・・・」

そういつた直後、

零はその場を去つていた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6021f/>

エンゲージは唐突に・・・

2010年10月28日05時09分発行